

「多様性の教育」に関する研究

小岩 大・上園 悦史・荻野 聡
齋藤 貴博・杉坂 洋嗣・八坂 弘

I 研究の背景と目的

現代は変化の激しい時代といわれる。そして今後、変化はさらに急速に進み、現存しない仕事に就いたり、開発されていない技術を使ったり、これまで直面しなかったような問題を解決したりすることが求められるようになるという¹⁾。こうした先行き不透明で、予測困難な未来を生きる子どもたちに、我々はどうのような力を育む必要があるのだろうか。

この問いに対し、本研究では、近年、多方面で盛んに議論されている「多様性」に着目している。その理由は次の3つである。

1つ目は、「多様性」に対応する力が変化の激しい未来において必要かつ主要な力と考えるからである。グローバル化や価値観の多様化が進むこれからの社会では、様々な文化や価値観、行動様式をもった人々と共生することが求められる。自分の価値観だけでなく、他者の価値観やその背景を踏まえながら、協働したり、問題を解決したりすることが必要になる。こうした多様性への対応が求められる社会において、どのような力が必要になり、それをいかにして育むかを追究することは重要な課題と考える。

2つ目は、竹早中学校がもともと多様性の土壌をもっているからである。例えば、生徒の出身小学校は、附属竹早小学校と附属大泉小学校、外部の小学校と多様であり、その出身地も一都三県にまたがる。また、生徒の半分が卒業する竹早小学校では、小学校1年生から6年生までの縦割り班活動を伝統的に行っており、竹早小学校出身の生徒は、異学年の多様性の中で育ってきている。さらに、幼稚園と小学校、中学校が一つの敷地の中にある竹早地区では、長く幼小中連携教育研究に取り組んでおり、異校種

の交流や合同授業を盛んに行うなど、多様な子どもと多様な学校文化の中でよりよい連携教育を研究してきた伝統もある²⁾。このように、竹早中学校は、多様な文化や経験をもった生徒が共生し、その中で創造され、受け継がれてきた文化と伝統の上に成り立っている。こうした本校の特徴を活かすことで、より特色のある研究が展開できると考えた。

3つ目は、東京学芸大学との連携プロジェクトである。本校は、一昨年度より東京学芸大学が自治体と附属学校と連携して進める「附属学校等と協働した教員養成系大学による『経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒』へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト」に参画している³⁾。この目的は、深刻化する「子どもの貧困」問題を背景に、経済的に困難な状況にある児童・生徒を、教育の立場から支援する方策を開発することである。こうしたプロジェクトに参画し、経済的多様性の側面から教育を考える機会に恵まれたことが多様性に着目する契機となっている。

以上を背景に、本研究の目的は、多様性の社会に対応できる生徒を育てるための授業づくりの視点とそれに基づく授業を開発し、提案することである。

この目的に対し、次の手順で研究を進めている。まず、多様性の議論が最初に起こった企業経営の文脈と教育の文脈における先行研究を検討し、多様性の教育を考えるための基本枠組みを導出する。次に、得られた枠組みの視点から、これまでの授業実践を検討し、その枠組みに基づく授業の具体的な姿や授業構成上の視点を検討する。そして、その成果をもとに授業を構想、実践し、その有効性を検証する。

II 研究運営

研究は、研究部が研究計画や内容の提案をつくり、その提案を全教員で検討するという形で進めている。

提案をつくる研究部会は、6名で構成され、月に2回ほど開かれる。一方、提案を検討する場は、協議会と職員会である。協議会は、主に研究内容に関わる提案を検討し、月に1回開かれるが、提案がない場合は実施しないこともある。職員会議は、例えば公開研修会の運営等の研究内容以外の提案を検討し、月に2回程開かれる。研究部会、協議会、職員会の三者の関係を図示すると、図1になる。

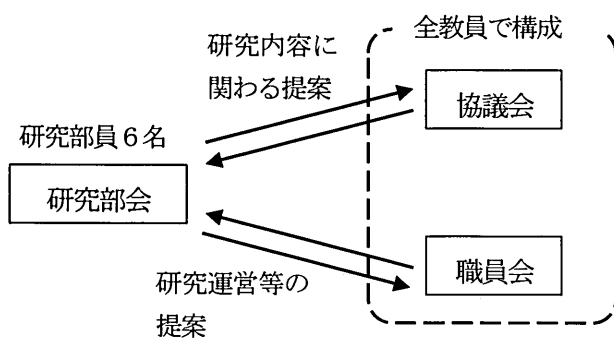


図1 研究運営

このように、研究部がつくる提案を、協議会や職員会で検討し、そこで出た意見を受けて再度研究部で案を練り直すというサイクルを繰り返して研究を進めていくという研究運営である。

III 昨年度の研究経緯

1 「多様性の教育」の基本枠組み：「多様性を理解する」と「多様性を活かす」

「多様性の教育」をどのような視点から考えていくべきなのか。単に多様なものを認め、受容するというだけでよいのだろうか。

この問いに迫るために、まず、企業経営と教育の両方の文脈における「多様性」に関する先行研究を検討した。企業経営に着目するのは、教育よりも先に、多様性の問題が議論されてきた経緯があり、そこでの先人の多様性の捉えや考えから示唆を得ようと考えたからである⁴⁾。

検討の結果、企業経営の文脈では、社会の変化とともに、多様性に対する捉えも変容してきた様相がみられた。すなわち、「多様性を受容する」から、

価値あるものとして積極的に「活かす」という考え方への発展である。言い換えれば、多様性をマイナスのものとする考え方から企業経営の発展のために活かすべきプラスのものとする考え方への発展である^{5) 6)}。「多様性」を意味するダイバーシティという言葉に、「包含」「包括」を意味する「インクルージョン」という言葉が加わった「ダイバーシティ&インクルージョン」という言葉が生まれたことは、まさにこのことを象徴している。

教育の文脈においても、「多様性を活かす」という考え方はみられ、「子どものよりよい学び」の実現のために多様性を積極的に活かそうという考え方が確認できる^{7) 8)}。

こうした検討から、本研究では、「多様性の教育」の基本的枠組みとして「多様性を理解する」と「多様性を活かす」を設定する。前者は、多様性を理解することに焦点があり、多様性が学ぶ「対象」として位置づく。一方、後者は、学びを深めるために多様性を活かすことに焦点があり、多様性が学びを深めるための「手段」として位置づく。

これらは、ややもすると「理解する」が先にあり、それから「活かす」という序列を想定しがちだが、そうではなく、両輪の関係として考えたい。多様性を「活かす」には「理解する」が必要になるであろうし、逆に「活かそう」とすることで「理解する」こともありうると考えられるからである。従って、授業づくりでは、便宜上、授業のねらいに応じてどちらかに重点を置くが、実際には両者が密接に関連していると捉えられ、両方の視点から柔軟に実践を考えていくことが重要と考える。

2 めざす生徒像の設定

こうした枠組みの検討の一方で、研究目的を教員間で具体的に共有するために、めざす生徒像も検討した。設定した生徒像は次の通りである。

*他者との違いを価値あるものとして理解し
生かして、共生社会を創り続ける生徒*

このめざす生徒像は、多様性の文脈を基礎に、グローバル化の進展や AI 時代の到来といった未来志

向の観点を入れて、研究部がたたき台をつくり、全教員で検討し設定されたものである。「多様性の教育」はこうした生徒の育成をめざして行われる。

IV 今年度の研究経緯

1 本校の教育でめざす生徒像

上述のめざす生徒像の議論の中で、本校がめざす教育と多様性の教育との関係をどのように捉えるとよいのか、言い換えれば「学校全体の教育がめざす生徒像と多様性の教育がめざす生徒像の関係はどうなっているのか」という点が問題になった。

そこで、今年度は、多様性の教育に限らず、本校の教育全体においてどのような生徒をめざすのか、その生徒像を議論することから始めた。

めざす生徒像は、本校の教育方針を基礎に、未来志向の観点と本校の強み・弱みの観点を加えて議論された。ここでいう「未来志向」とは、「10年後の社会で求められる力」「10年後の社会に対応する力」という意味である。その具体を考えるに当たっては、内閣府が提唱する Society5.0⁹⁾ や OECD の Education2030¹⁰⁾ の考えをもとにした。一方、「本校の強み・弱み」の観点とは、「現在の本校の強みと弱み」、「今後伸ばしていく強みと改善していく必要がある弱み」について全教員で議論し、そこで出た意見をめざす生徒像に反映させていくことを意図した観点である。

以上の方針に基づく議論の結果、本校の教育のめざす生徒像は次のように設定された。

*主体的に他者と関わり、高め合いながら、
新たな価値を創造しようとする生徒*

「主体的」は、「自分」あるいは「集団」の主体性を意味し、「他者と関わり、高め合いながら」には、本研究の焦点である「多様性を理解し活かす」、あるいは目標に向けて集団で取り組むといった「協働」の意味を込めた。また、「新たな価値を創造しようとする」には、新しい価値を創造するだけでなく、これまでの価値を見直し、そのよさを再発見するという意味も含めている。不易な価値を大切に

するとともに、これまでの価値を知ることが新たな価値を創造する基礎になりうると考えたからである。また、創造する過程では、身につけた知識や技能、見方や考え方を活用できるという意味も込めている。なお、「主体的に」「他者と関わり、高め合いながら」「新たな価値を創造しようとする」のいずれにおいても、「未来志向」「本校の強み・弱み」の両観点が反映されている。

ここで、「竹早中学校のめざす生徒像」と「多様性の教育のめざす生徒像」との関係、及び「教育方針」「未来志向」「本校の強み・弱み」の種々の観点との関係を確認しておく、図2のように整理できる。

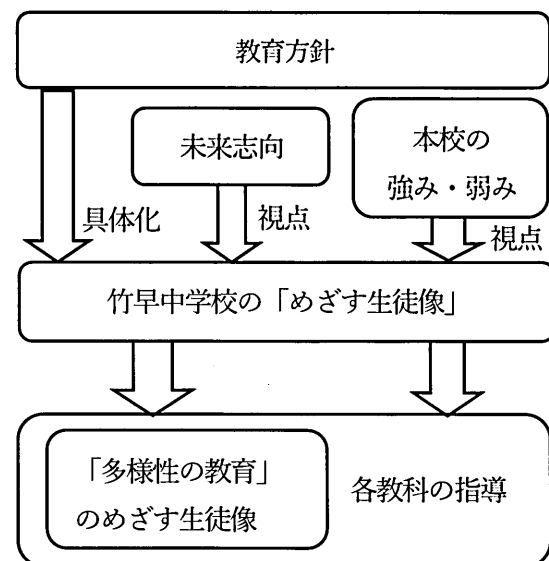


図2 めざす生徒像の関係

「竹早中学校の「めざす生徒像」」が今年度検討した本節に示したものであり、「多様性の教育」のめざす生徒像が昨年度設定した前章に示したものである。このように、各教科の指導を通して「多様性の教育」を行い、竹早中学校でめざす生徒像の一部を実現し、他の部分は「各教科の指導」等で実現するという関係である。逆に言えば「多様性の教育」や「各教科の指導」等を総合して「竹早中学校のめざす生徒像」を実現するという関係である。

2 多様性を「理解する」「活かす」の枠組みの 実践的検討

昨年度提案した「多様性の教育」の基本的枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」に基づく

具体的な授業像を求めて実践的検討を行った。その方法は、研究部の教員がもつ実践事例を2つの枠組みの視点から検討するというものである。検討対象とした実践事例は、「多様性を理解する」が社会科の難民問題に関する実践であり、「多様性を活かす」が国語科の小中合同による物語創作の実践である。これらの実践は、もともと多様性の教育を意図した実践されたものではないが、各枠組みの要素を内在していると考えられたため、検討対象に選んだ。これらの実践を多様性の観点から見直すと、どのような「多様性の教育」の授業を想定でき、どのような教育的価値を実現しうるかを探った。

(1) 「多様性を理解する」実践の検討

検討した実践は、ヨーロッパの難民問題を扱った社会科の授業である。難民問題それ自体が人種、国籍、文化等の多様性を含んでいるが、社会科としての授業のねらいは、「難民の受け入れ」の問題の賛否を議論することを通して、難民問題を多面的・多角的に考えることにある。これに対し、「多様性の理解」の視点から、この授業で理解させたい多様性が何かを授業者に問うと、授業者は「子どもがもつ考え・意見・立場の多様性」と特徴づけた。

検討の中で話題になったことは、多様な考えや立場の存在を知ることが生徒にとってどのような意味をもつのか、そもそも考えや立場の多様性を理解するとはどういうことかということである。一般的に言えば、多様性の文脈でよく上がる国籍や身体的特徴、LGBTといった話題について、単にそういった事実があることを知れば、多様性を理解したことになるのかという問いである。

これについて、次の点に眼を向けることが重要ではないかという話になった。それは、こうした多様性に関わる事実の背景にある「多様性の社会でよりよく生きるために必要な力」であり、その育成が「多様性を理解する」授業において真にねらうことではないかということである。そこで、この授業で考えられる「多様性の社会でよりよく生きるために必要な力」を授業者に設定してもらったところ、「多様性の社会の中での生き方の戦略（ストラテジー）」と「共生的な態度（平和の視点）」が挙げられた。

将来、彼らが直面する社会は多様性に溢れ、仮に先に挙げたようなテーマを授業で扱ったとしても、その全てに対応する力を育むことは難しいだろう。とすると、様々な多様性の問題に対応できる核となる汎用的な力を見出し、それを育むことを考えることが必要になってくる。

多様性の社会に対応するために必要な汎用的な力とは何か。またそれをどのように育むのか。「多様性を理解する」授業の構想における重要な視点と考える。

(2) 「多様性を活かす」実践の検討

検討した実践は、小中合同で行われた国語科の授業である。小学校第2学年と中学校第1学年でグループを組み、1つの物語を創るという内容である。グループ活動では、小学生、中学生それぞれが物語のアイデアを出すのだが、小学2年生の発想は、中学1年生の発想とかけ離れたものが多く、いかにして小学生のアイデアを活かし、物語を創るかがポイントとなった。

先述のように、「多様性を活かす」目的は「学びを深める」ことにある。この視点から本授業をみると、中学生1年生と小学2年生という異年齢に由来する「発想や考えの多様性を活かして」物語創作に関わる生徒の「学びを深める」授業として捉えることができる。実際、授業者によれば、小学生が入ることにより、中学生同士では出てこない新しい発想が入り、それをどのように活かすかを考える過程で、これまで以上の活発な議論や試行錯誤が起り、物語創作を深めていったという。小学生の新しい発想が、中学生に「それをいかにして物語に取り込むか」という課題を生み、その課題解消の過程を通して学びを深めていったとみることができる。特に、小学2年生と中学1年生では年齢差が大きいので、発想の差も大きく、その差を埋めるのは大変であった。しかしその分、生徒は、よく考え、学びの深まりにつながったと授業者は述べる。「多様」といつたときの異なりの程度は、ときとして学びの深まりに影響しうることを示唆する指摘である。

本実践でみられた多様性を活かした学びの深まりを図に整理すると、図3のように表すことができ

る。「中学生の考え A」は、「小学生の考え」を取り入れようとすることで、それを含むように考えを広げ、「中学生の考え A'」となる。この広がり「中学生の考え」の深まりである。

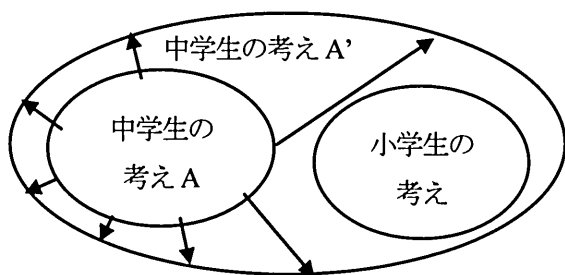


図3 他者の考えを包摂する学びの深まり

「多様性」が存在するという事は、そこには「異なるもの」との比較がある。生徒は、異なるものとの比較により、その共通点や相違点を見出しながらかえを深めていく。また、上記の実践では、異なり程度が学びの深まりに影響しうることも示唆された。このように考えると、「多様性を活かす」授業づくりでは、どのような「異なるもの」を比較させるか、そしてそれにより「どのように学びを深めるか」という視点が基本になると考える。

V 成果と課題

今年度の成果は2つである。1つは、「多様性の教育」のめざす生徒像の上位目標として、竹早中学校の教育がめざす生徒像を設定できたことである。2つ目は、「多様性の教育」の枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」について実践の検討を通して、その内容を深めるとともに授業づくりの一視点を得たことである。具体的にいえば、「多様性を理解する」授業については、ねらいとする多様性の理解を通して、多様性の社会で必要になるどのような汎用的な力を育成するのかという視点である。一方、「多様性を活かす」授業については、どのような異なるものを比較させ、それによりどのように学びを深めるのかという視点である。

今後の課題は、こうした視点から授業をつくり、子どもの姿の検討を通して、視点を精緻化するとともに、新たな視点も検討し、各枠組みを深化させることである。

引用・参考文献

- 1) OECD, 「OECD Education 2030 プロジェクト」
https://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf (最終確認日 2019 年 5 月 2 日)
- 2) 東京学芸大学竹早地区幼稚園・小学校・中学校, 『子どもが輝く一幼小中連携の教育が教えてくれたこと』, 2018, 東洋館出版社.
- 3) 東京学芸大学パッケージ型支援プロジェクト, 『附属学校等と協働した教員養成系大学による「経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒」へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト 平成二十九年度報告書』, 2018.
- 4) 先行研究の検討の詳細は以下を参照されたい, 齋藤貴博・小岩大, 「「多様性の教育」における理論検討」, 2019, 東京学芸大学附属竹早中学校研究紀要, 第 57 号, pp. 53-56.
- 5) 谷口真美, 『ダイバシティ・マネジメントー多様性をいかに組織』, 2005, 白桃書房.
- 6) 荒金雅子, 『多様性を活かすダイバーシティ経営 基礎編』, 2013, 日本規格協会.
- 7) 多田孝志, 『対話型授業の理論と実践ー深い思考を生起させる 12 の要件』, 2018, 教育出版.
- 8) 伊井義人 編著, 『多様性を活かす教育を考える 七つのヒント』, 2015, 共同文化社.
- 9) 内閣府 「Society5.0ー科学技術政策」
https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html. (最終確認日 2020 年 1 月 11 日)
- 10) 上掲書 1)